



サクンタラ姫

森田草平稿

本間文庫
文庫 14
A174





サウニタラ 姫 梗概 二十五弦

印度の砂翁と呼ぶカリカヤが今に傳はれしこと戯曲中、最優れたるものにて、梵語文子の花とす。いはれ、四世紀より八世紀の間に現はれしものなり。印度戯曲特色の一事として、この作も當時の傳説を戯曲化したるものなり。ことば争ふ可からず。されど歐州の傳説が其二三を除くの外、皆東洋より輸入されしものなることより見るも、以て印度傳説の輕んずべからざるを知りし。また



● 豪華なものである特色も、想像の奔逸極りなく、豪宕にして濃艶を極むる比喩の殆ど迎接に違なきは、只、~~其の~~熱帯文藝にのみこれを見るなり。既に材料を傳説採れば、印文戯曲の多くが目出なく、局を統ぶるも其特色の一なりといふ。その外序幕に頭取、俳優等を舞臺に出して、見物に向て挨拶せしむるも、印文劇の習慣なりといふべき、今は省きし。

王ツシヤレタは今朝打立たる狩の場、おとろか下に一匹の羚羊見あつて、何處までも

とてはぬ
とてはぬ
とてはぬ

追ひ行くほめた、~~其の~~供奉の仙人をも遠く離れ、幾重の丘を下り、谷を越え、戎事の轍に火花を散らし、道芝の露路氷雨と降りて走り出すが、今を矢次と弓に箭審ひ教たる時、天の隱者出立りて、かよわき小鹿の生命われ等に賜へ、こは聖カネカ修道の靈場にて、この森林に棲める生類は、皆、師の養育者なるサクシラウ姫が保護を受く、ものふの打物は弱者のために揮はるときは、無毒の鳥獸を滅すためなりといふるを、ツシヤレタ快く詠ひて、斯かる靈地に來りし甲斐に、われも執り、淨界の塵

国氣に身も心をも澄まさんと、聖は今巡錫
の途に上りて不在と知れど、車を下りて御者
には馬に飲かほせし。王者の綬を徹して、い
そり林深く分けりぬ。行くほかに朝閑かなる
本林影の細道、極樂鳥のたり尾を曳きて
ゆるく廻り、鹿人に刺れて若芽をあきら
間をば、えことしもなく傍ひしか、櫻欄のひろ
葉の茂みかかれ、若くしき女の声聞ゆ。
サウシタラ「おかく目毎花草の根に水灌ぐは
父の聖が命なるも、花の姿の優しきは妹の
やうにも思はばぞ。」
侍女「サウシタラ」おん身の水灌ぎ玉ひしは皆

り
ほ
れ

今嘆き初^は夏の花なる。花の盛過ぎしは方
の草にも水を遣りませ、徳は已に興なきも
のに旋されてこそ更に大ひなりといへば。
サウシタラ「善くをいいたまひつれ。」
王は樹蔭に躲れて窺へり。賤の手草に刺
れど、サウシタラ姫が胸は熱に波立てるを侍
女をして上衣の袷目解かすれば、衣の袷は
軽く腰を纏ひて、恰も色よき花を葉蔭に
に透すに似たり。あゝ白蓮の花を支ふる莖
は多く、その莖に支へらるる花は多くして
且つ艶なり。王の心は時めきぬ。
やめて二人の女は花のめをとなりといふ、マ
ルリ

カの花苗纏絡めりアムラの樹の下を撰びて、手を
取り草に座しけるが、こと甚末なきは若き女の
思ふか如きことを思はるたや、少時ありて
フリヤムダへ見たまへ、マドハ心の花の季を節なら
ぬに嘆きたるは、姫が婚姻の期近づきたる徴
なうずや。
侍女アミエヤ「さなり、姫がこの花をのみ珠によく
水灌ぎたるも其故なうむ。
サウシタウ姫は言葉怖しく、妹と思へばを、妹を
愛せぬ姉やある。
王の眼は彌々少女が姿を離れ難くなうて、
姫は今かく僧院の裡に生い立てとも、必ず庫

徴

族の娶り難き婆羅門の出にはあらず、我が心
の中何とはなしたに只かく信せらるると云けり。
今一疋の安虫蜂姫が耳のほそりに、はりて
恋の秘密を耳くか如く、豊かなる唇のあたり
に飛んでは甘き香舌に酔ふか如く、ツシヤシタ蜂
の幸を差次みて、心もうつくにを成り行く。
姫は手を擧げて振りなかり、「我に力
を頼して、早くこの蜂追ひて。」
フリヤムダ「この林の保護者は王ツシヤシタの外な
きを、おれ等何の力ありておん身を救ひ得
べき。」
王は前に進み出でぬ。

ツギ
フルの子孫この林を領する間は、何もかも
御座すしき姫を恨まう得べき事

二人の少女は故馬きて顔見合せか、心の限り
寛容をもてたすは、僧院の掟なり。花菓
物を盛つたる目籠、捧げ、客の足を冷水に
浸さんなど牛牯を、王は暫
と留めて、少女等を草の上に座らせて共
に語りぬ。客も玉の如き美男にて、物語の
繪にも見るべき貴公子なり。サウと云う姫が
胸は穴切に裏きて、聖なる森林に住める女
に似つかしからぬ心動き、客の前には、頭

經典のは者
こはかみかみ?

魔風

み俯向かる。王は只都より来り、
の御守侶、王は只都より来り、
向ひて、聖カコナは、常日に大神に仕ふる身な
るに、この姫のえが子なりと云ふは如何にと
問へば、ふたりの詠れる、ひととせスウエルが
の諸神、クザの後子固なる聖王カウシカの
威力を怖れて、にむふメ子力を遣討て之を
惑はせんとせしことあり。王は、
かかなる次女に心を奪はれて、抑へ難き樂欲
の魔風に誘はれしか、そなたサウと云う姫は
生りあつたりとぞ。尚ほ聖カコナが今姫の
ために良縁をおめつとありと聞ききて、

此は
田記

玉の胸は歡びに溢れたり。侍女の斯くあからさまに物詰れるを、姫は座に墮れ、立去らんとして、面に怒を見せ、詰るか如く、**「ふたりを觀みれども、侍女は従はず。なりやふたナキに、おん身の珠に愛でたまふ花に、共に水滸おたるお加房を忘れたまひしか。その勞に酬ひ玉はぬるは此を放つまじ。」**王はこれを遠かりて「許したまへ、姫はさきの骨折に痛く勞れたりと見え、両手を力なく垂れて、みだれ、髪は雲の如く肩に懸れ、いざ、われ姫に代りておん身の勞に酬ひん。」かくいひて、指環を抜き取りて與ふるに、侍女は

これに刻めるツシヤシヤなる文字を讀みて互に眼を見合せぬ。**贈** 餘りに軽ろき贈物ながら、國王より●賜はれば、おれも今迄貴重なりしものぞ。『さうば人に譲り玉ふべき品ならず。姫か買ひめは、おん身のこと甚希のみて儂はれたれば、とて指環を返すつ。』**カニエユヤ** 姫よ、おん身はかく情篤きまらうごに庇はれながら、何處に適かんとして玉ふか。『姫はためらいつも、立去り兼、自らの心を怪しみ惑なり。』**おりやんが** 姫よ、斯くもなほ去らんとして玉ふか。

サウシタラ「われはおの身達が婢ならねば、適当
と思ふところに行かん。」
かゝいへども姫は尚ほ同ドところを行き交
り。ツレヤシタは空切に己が勝利を祝しぬ。
この時、玉の跡を索めて追ひ来りし官人ももに
狩り出されて、大象一足暴おひに暴おひて馳
け来りて、少女等は遠て、庵室の中に避けん
とせしが、ここに始めて客の國王なりしことを
確め、かくと知らざりし今までの疎忽を詫びて
再會を誓りて去りぬ。
一人となりし玉がサウシタラ姫を慕ふ情は愈
々莫かりて、風に逆へる長流の如く、足は帰路

に向へるも、心は姫に従つて離れり。

二、

飯りて後もサウシタラ姫が面影、幻となりて離
れねば、ツレヤシタは心鬱々として樂まず、ふ
らふ。か道化たること甚だも耳を籍さ
で、再び庵室に近づぐべし、手だてに只管
頭を悩む時、却て彼方より使者来りて、
聖カコナが留守の時、化整の起の、席止まね
ば、暫く僧院に留まりて、
世玉へと請ひければ、玉は即座にその請に應
じて、
山門、
た入れり。

註に曰くこれを
樂天的メタメ
アといふ
成程と云ふは
かゝいへども
けに

詩をひびきす

倭房の晝静かなる窓にぬよして、ツレヤシ
タはひより物思ひり。
ツレヤシタツツ戀の神が戟は花をて研かれたる
に、瓦の鋭さは何故ぞ。この神と月とのため
には情人たち無慙にも欺かる。月の女神
は冷やかなる光を放ち、戀の男神は花
の箭を携ふは、恋に悩める若人のいひ習
はせなれど、両つながら誤れり。見よ、月は
露掛けき光と共に、窓人の上に烈しき火を注
ぎ、窓の神は花の矢の根と見せ、鋭き金
剛石の征矢降らす。さはいへ魚の旗標立
てたる神、美けしき窓人と力を特せ

渴

ておか玉の緒を断たんとも、そこに眞の甘き
快楽は興へらるるなり。あ、力猛き
神、われ等神の御名を稱ふる時にすり、神
は少しも憐みを垂れ給はぬか。今はわれ窓
人の姿を眺むる外に心の喝を流すものも
なり。日ざかり劇しき炎熱を避けて、マ
リニ河のほとり夕マラの樹蔭を、二人の侍女
に伴はれて臣の逍遙するは今を。
かくて玉は河面より吹来る、水蒸気を含
める微風に面を打たせながら、白き砂の
上の足跡、摘み捨てられし花のまだ凋むは
てぬなほをたよりて、終にとある木かげ

余り倦也
惟悴?

岩の上た花草折敷きて座せる三人の少女を垣間見たり。

侍女は蓮の葉にて作れる扇もて、左右よりあふぎくか、姫はそれすら煩さ気た断れり。哀顔の色はその面に著しく、その心を食むは何の憂を、蓮の~~葉~~穢穢を穢りたる手纏の軽く腕にかゝるもたゆかに、取みたりたる倦怠のさまの美しき。意と夏の目影とは同しく人の身を燃せむも、燧か如き日光は、若き人の頼むをば同しく至樂の境に導くものならず。名醫も病の源を知らずは治するに由ず。

緋のよほイネ

いづれは物語の~~ま~~まにもあるらん如き病なる~~ま~~まとして、二人の侍女は言甚あを居して姫がわづらひの源を問へむも、少女は答ふる術を知らず。●姫が顔は乾き、唇の色は失せぬ。まことに赤道直下の熱風に吹き枯らされし草の葉の、まじくも緋なるに似たるかな。
せめては~~い~~い~~ら~~らぬ悲しみの半は~~い~~い~~ら~~らぬばやと切ぢかる二人が情に絆されて、姫がやうく浅せしはツシヤシタの名なり。木蔭にて浅れ聞きたる玉の喜びは飛び立つばかり。意は彼が懊悩の源に於て、又そを除きぬ。夏の日大空

を蓋ふ雲は、日光の蔽ふと喘ぐ地上の動
物を救ふ。

心弱きサウタラ姫は、この家成るやうにと
泣いて二人に訴へぬ。

かくて終に堅くこの秘密を守ると共に
花かたみを玉に捧ぐるを名として、その下

に艶書きを隠すこと、一つ。姫は少女気
のさすが心すまねども、強ひて二人のい

ふかまたに、恋のこころを陳べたる二行の
歌を編まんらつ。王はいかなる教馬喜

をもて、この優さき女詩人が少く傾け
たる疑いつきを窺ひしよ。

サウタラ「歌は成りぬ。されど書くべき紙も筆

もなし。」

「只そのまに誦したまへ、われは

鸚鵡の胸の和毛に似たる、蓮の若葉のた

爪もて刻みつくべければ。」

サウタラ「わか心、君は知らずな、されど日

となく夜となく、恋はわか心を暖む。」

「王は木蔭を現れ出で、唱ふらう
君か心恋はた暖む、されど男の
恋はわか心を燬く。曙の光は月見草の
花を止むるのみなれど、月見草の光を
消すものを。」

曙

徐

に出さで忍びわたりたる二人の恋は、かくて一
たびその緒にを得ると共に、野の草の萌ゆる
か如くに生ひ立ちぬ。新に摘みたる花草の
よた文の袖を列ねて座する時、姐が顔
色は除々に活気を帯び来りて、目ねもす炎
熱に惚める極樂鳥の、一村わたる驟雨に
サ蘇れるにも似たり。あたりの侍女は子鹿の
母を捜すを助くといひて去らんす。
サタラ「我をいそり残して行きたまふな。」
二人「いそりや、世界の君主を傍に置きて」
と云ひ来りて、逃げ行くを、姐は遠て追ふ。
ツレヤ「眞昼の日影散れば、見るも

たゆ気なる優しの脚身に障らばいかたずべき。
サウ「さう」否、と放し去く、われは未だ自
らの心のまゝに處し得べき身ならぬ。
ツレヤ「その心あつかひ並なり、天上の王
インドラが例に倣いて、ガゴールの式もて結婚
すれば、世に二人を妨ぐるものもあらど、おん身
は是を許し玉はぬか。」
サウ「さう」只、と放し去く、われは二人の侍女
の行くところに伴はざるべからず。
ツレヤ「優なるツレヤの花の硬き莖をもて
るにも似て、すげなきおん身の心よな。見た
ま、新月もおん身が美しき讚へんので、

とうか、ちんませんか

み空を下りて君が腕に手環となりて纏まひ
たりし。おされど

サウシタラ「おが眼に月の見へぬは、髪に巻き
蓮の花粉、微風の戦ぎにつれておが眼に

入りたるにや」
ツシヤタ「さらばおん身の眼より花の塵を

吹き出す役をば、枉げて我に許したまへ」
サウシタラ「君が情は嬉しけれど、おれは

君に信を置く能はず」
ツシヤタ「否、新しき刀仕は令夫人の命

を越ゆるか如きことあらう」
いかた又得難き機会なるよ、姫が小さき頭

湯

誘惑に

はツシヤタが暈しき腕に抱かれて怖れさ
まもなく、羚羊の如き眼おしは一たび公子が
おもてに注がれしが、忽ち伏眼になりつ。微か
に開きたる辰は堪へ難き喝をいやすべし、
口づけを促すに似たり。王が身は
堪えずして震へり。

サウシタラ「金枝玉葉の君が斯かるみ情には、
おれいかけて翫み余らすべし」

ツシヤタ「おん身が優さしき辰の香を吸
びたき、願ひの外あらう」

サウシタラ「それのみとや」
ツシヤタ「蜜蜂は白蓮の花のかほりのみ

に満足するものぞ。
男の口づけは長く、燃ゆるやうなりき。

川面を包み行けば、サクラウラ姫を問ひよ
る。尼がウタシが声に驚かされて、ツシヤシ
クは急ぎ木陰にかくれぬ。棕櫚のひろ葉
の蔭みがくくく、且つばあおたひしき
二人の恋心や。

侍女ふたり緑の野に下りて、祭の庭に
くべき花を採りながら、ガニダルバの式を奉

げて國王の配となりし女が幸を喜ぶよるこぶ
と共に、あるは都に帰り行きし王が、後宮
の妃嬪に取圍るやうになりて、
忘る事なきやを氣遣ひ、あるは聖
ナカ何なるの上にて、この事ありしと聞かば、
色如何なるなど案じ詠る。森の彼方に
宥の訪のふ声す。二人は耳を歌てしが、留
守を預れるサクラウラ姫が放心したるが如き
この頃の容子に、如何にせばやと二人の躰ら
ふ時、天地をどよめす呪ひの声懐く
いかた、世等宥を遇する道を知らざるか、
さらばわが回へし難き呪祖をきけ、

う姫がさきまに思ひ詰めたる玉は、醉の中は発
 せし言葉も醒めての後に覺えぬ如く、再び逢
 ふとも全く姫を忘れ果つや。」
 かく云ひ棄て、憤怒の形相すさまじく、ツラ
 バスの魔王は踵を回して去らんとするを、二
 人の侍女は敬馬き眺み、走りて前に立戻
 かり、地に伏して詫びるは、漸く「玉が去る
 に臨みて姫に其へたる指環を眺めたらば、こ
 の呪祖の力は全く除かるべし」とまで、弛め
 得たり。これにて二人は僅に安堵の思ひ
 ありて、寤室に戻りしが、姫が小卓に倚り
 て尤手に頭を支へ、をち方の空を眺めたる

姿の、容は馬心かおが身をも忘れ果てたるが
 如き憐れさに、ふたりは終に怖ろしき呪ひの
 ことどもを、姫に告ぐに忍びがりき。
 蛸蝶の羽風にも、サ肥の衣袖も
 すべきマリカの花の上に、誰か淋きたぎつ、熱
 湯を注ぎ得べき。

かと
 * * * * *
 とある朝、月影漸く白み、夜の花獨り
 行けば、消え残したる花のなほりの有るか無き
 葦するさま、愛人の留守を憶え、難き悲心
 に倦したる花嫁は似たり。くれなゐの曙光は
 ばかりの枝に滴たる露路を薄紫に染めて、

る護麻子の烟を目

ホーラの贅の式の今や始まらんとする次、侍女ア
ニシマは、花を採らんともせず、園を彷徨ひ
て、サウエタラ姫が上を安あぐ、約束を破りし王
を恨みて、指環の呪いの既に元の験を現せし
かと危み、かつは姫が今懐妊の身なること
を、如何にして聖王に告ぐべきか、なと思ひ悩め
る時、吉報、~~...~~ありて、~~...~~を齎しぬ。
この曉、~~...~~は奈の庭に立ちて、たち上
て、世界の覇者たるべき英主、サウエタラ姫が
胎内に宿れりと宣らせき。これによりて、聖
は烟渦巻く矢の真中に、牛酪の落ちし昔

松島製

兆を是なりとて、姫を都の王が許へ遣はす
ことせりと。

今、朝の浴ヲ果て、主尼がウタシが後ろに
引沿ふて、之う姫が、~~...~~次女の神々しく

ふたりの侍女は近づきて息災延命の護符
など、姫が衣に結かけくるなべに、生憎の涙
は溢れ来ぬ。

サウエタラ、萬事は今朝決せられぬ、おん身
等と斯くてあるまじき時の、いつの日に来んと
も世見えず」として、姫の涙を拭き、ふたりは
「泣き玉ふな」といひて、~~...~~泣く。
野に咲ける花を綴り、~~...~~姫が衣の大内の

河沼の女王なる

女御にはあまききとて、侍女の御てらを、
弟子のひとり出来りて、聖の命にて澤の
ほとりに行き、鮮き花採らんとせしに、
いふ現れてこれ等の岳を姫に捧げ、
つとて花摺の御衣、足に塗る顔料、宝玉
など取出し、深山の樹の空洞に棲める空
蜂の蓮の花に奉仕すといへる類なる事。
浮世の縁を断ちて、朝な夕な浄業に志せ
し身にも、尚ほ恩愛の戀しみ、恨え難き
や、聖は姫が手を取りて、
りなかり、ひとへに姫が前途に祈願をこらせり。
袋とせこの林に住みて、花に水灌ぎ、花の季

節を待つ外なかりし人は今去らば、朝風
花粉の吹雪を散らし、行手の路は水蔭多
し。花も憐れを知るかと、姫はマドハンの花
を抱きてかろく云ふ。

サウコウ「嬉れしくとも悲しきは旅路なり。
父君この花をおれと思ひて撫しませ、又
二人の友もわれに代りて水灌ぎたまふ。
姫が心は尚ほ乃子ある鹿に残り、足に縋
はる母なき子鹿の上にも涙溢れつ。
カシナ「涙を留めよ、姫、おん身が過ぐべき
わが世の旅は、岐路、迷ひ安く、高低
足傷き安し。操が女が唯一の力なり。」

旅人を送りては水の在るところに袂を分つ印の習
はせねば、とあり池のほとりに着きて人々
木蔭に休ひて別れを惜しむ。聖は姫に向
ひて、王宮に入りて後まじ
~~王に仕ふる道~~、または牧多き王
妃の中に交はり、婢僕に對する心得なご説き
諭せしが、姫を都に送り居べき二人の隠者
には、王に傳ふべき詞を示めしなり。尚ほ姫が
乞ひに任せて尼がウタしをも都まで從はしむ
ることしつ。姫は老いたる聖を抱き、ふたり
の侍女とも抱擁を交はしぬ。
カニヤノ姫よ、王若しおん身を忘れし如きこと

あうば、必ず王の名を刻めるその指環を示め
~~す~~すことを忘れ玉ふな。
姫は驚き顔色を失ひつ、「何とや、おん身の
こと葉のみで、わか胸騒ぎせらるるは。
フリヤムバガカニヤノ、憂は常に不幸の
前兆を恐るれども、そか道まじとなりし試希ねなり。
朝日稍々高く上れり。姫は再び聖を抱きつ、
よ、われ等は何れの日ニたび相見得べき。
カニヤノカニヤノ、汝の生める子に世を譲りて、ツシヤシタと共
にこの閑かなる林に晩年を送るとて来らん折に
こそ。」
日は高し。がウタしの声に促されて姫は立ちぬ。

花いろくの姫が衣の木の葉隠れに遠かり行く
と見て、二人の侍女は声を放ちて泣きぬ。

五、

國王ヅシヤレタは、~~事~~あかつき執貝の場にはの玉座に在りて、雪山の~~林~~鹿なる波女羅門の道場より、聖カエナの使者とて、徒弟二人老若の婦人を保護して来りしを奏上を受けしが、怪しきかな呪ひの魔力既に心を眩まして、さしも恋いわたるサコウ姫が上をばと下果てつ、只思ひかけなき訪問を審かむのみ。

松風堂

尾がウタに手を曳かれ、二人の隠者を従へてやうくより来れり。

サコウ「姉母上、お右の眼の處に痛みを

覺えゆるは、何ごこの悪き兆せをも」

「~~事~~がウタ、「心安かれ、わが子、大神の守護

は偏かれば」。

半ば上衣の辟衣に包まれて、夏すへに俯向きたる姫が姿の、世捨人の中に交りたるさま、恰も黄色なる枯葉の間に、瑞々しき若葉の萌えぐるか如きを、たゞ美しと見たかり玉の心は動かざりき。姫が胸は物とはなき恐れに波立ちぬ。

源 懐

宮中の侍官が斯くと聞へ上ぐるほどに使者の隠者は手を止めて欽伏す。王の謚問に應じて聖カコチが使命が傳へ、聖はまた王と姫との問に行はれしが、その式を批准し、且つ今懐胎の姫を玉の宮殿に送る旨を奏せり。感^んがウタにも言葉を流しぬ。されど、あく、何ごとぞ玉の面は不興氣に曇りたり。

ツシヤタ「汝等よの女をわが妻と呼ぶか。姫が恐ねは訶となれり。」

使者「殿下は今となりて悔ひ玉ひか、大神の祭壇のみにて誓ひ、詞を破らんとや。」

ツシヤタ「さる法はかなる。騙にて、おれを欺き、東すと思ふ思さ。」

使者は急ぎ立ちぬ。尾は耻ぢからふ。姫が上衣を脱かせ、^展物云はせんとして玉座近く押遣りぬ。玉を^展べたる如き少女が姿に見恍れ、王は、曙、露を慕ひて花に聚る蜜蜂の離れ難き思ひもあり、懐胎せし人妻なることを思ひて堅き心撼かず。姫は玉の心かくなる上は、云ふも甲斐なきわが身と思へども、かくて苦痛を忍ぶが女のさだめなりと、畏るく玉を見上げて、

わが夫………殿下、男の心は眼を粟

の花の短夜を待たで散るとはききけど、聖なる
林の中に、過ぎし日の懐かしきお言葉に比し
て、今のつれなき仰せは何ごとぞ。
玉は遠く耳を閉じて、隄を崩せし洪水の
すさまじき勢に流れひろがりて、高き樹を
根こぎにするらんやうに、我が積み徳を破
らん悪魔の声をと、ひたぶるに聞き入れず。
姫は悲しく、おうそれよ、指環をこゑと手を
眺むれば既にあらず。
サウタラ「あ、あお指環。」
がウタ「サウバタラの驛路近く、サニルサの
池にておん身が髪を洗ひし時、滑り落ち

にあらぬか。

「はほ、笑みて、」女どもの道辞を
作るすばやせ。

サウニタラ「よー指環こそはあらずとも、マ
リニ河の川風涼しき林中の道逢に、君は
蓮葉の杯もて鹿の子に水飲ませんとした
ま、ど、人見知りしと飲まず、わか手よりは飽
くまで飲むを見て、」異も友を愛するると
見ゆ、おん身等ふたりの本林の住者、ふたり
なからの可愛ゆさとのたまひしこと、よも
忘れ玉は、
ツシヤウ「止めよ女、蜜の如き言の葉もて

欺き得るはたはれ男のみぞ。
がウタし「さは暴くのたまひえ、浮世離れ
し林の中に生い立ちたれば、偽といふこと知る
子たよらず。」
ツレヤシナ「厄よ、女子は教へられずして偽を
知るものなり、教へられずば何なるべき。」
サクコタラ「君が鄙しき心根もて人のこころを
計りたまふか。君が心は美はしき草花に心
を蔽はれたる、底ひ知れぬ井底にも依たり。」
姫が唇は燃え、眼は輝きて、舌は絶望に
震へたり。いまだ雙方の心の奥も知らざらん、
急ぎて法びたる友情は、未ついに斯かる情熱

に終るべきか。
使者は尚ほこと葉を尽して玉と辛ひか、
一言に枉ホ難き心変りを見て、今は何じと
も無差道なりと、姫をばいどり疎して皆歸り去
らん。とす。夫に忘れられ友に捨てらるる悲や
さに、われをも連れ行き玉として、厄の袖に取
錠るを、流石に振り放ち兼ねるか、隠者
は声もあはせて、
「夫、おん身に不信ならば、おん身また夫を捨
てんとするか、心だに清くは婿とならうとも夫
の家に残るこそ女の道なれ。」
姫は戦へなから、ためらふを、

ツレヤシク光並なき望みもて女を欺くかれ、
花を咲かせ、日は蓮葉を閉かす。
われ争せか人妻を汚さんや。
かくても尚ほ使者の帰り行ける後、玉はいかに
せばやと思ひ惑ひしが、身二つとなる
宮中の侍官が玉に向つて、
まで女をおか家に養ひて、生るゝ子に四海
の覇者たる相やを見ん、天文の博
士が豫言に従ふば、その相えなはれるものは疑
もなぐ。王子なれば、その時改めて母子を
玉宮に入れまぬらすと云へるに任せた

姫は淡ながらに侍に侍れられて退くとせ
しが、絶望のあまり息も絶えくに禱る
やう。
「復しきある金の地の女神よ、頼るはわか
霊を奪ひて、おん神のみ胸に常しくた
瞬らせよ。」
この祈禱いまだ終らざらん、光ある神体
さと天より舞い下りて、人々の敬まらざる間もあ
らせず、姫を抱き抱きて虚空遙かに消え
失せぬ。

六、
城内の外、憐れなる漁夫は三人の挿更に向

許は救
まづいね
此の邊
大石

ひて、^志疑に己が寃を訴へていふ、一日綱にか
いり、魚の腹を割き、この指環出でたれ
ば、國王の品とは夢にも知らず、市中に鬻ら
んとて諸公の怪むところとなれり。その
こと葉の真らうきた、捕吏の長は寃も再一
應宮、廷の司人に伺はんとて、行き、
間もなく歸り来りて、王はこの指環を見り、
御喜悅、斜めならず、直に漁夫を許し、
御所あり、且つその寃を、
置かれ、と傳ふ。かて漁夫は失ふべかり
し命を捨い、が、あはれ其金は捕吏の
に分たれをばんぬ。

宮城の春爛けて、物の景色何處となく
寂がみ、宮辰の上に留まる雲の一片にも
色あり。サウシタウ姫か生母メ子カの命を度
けて、姫が身を護ねるにむふ、スラモ
シは、姫を地上より奪い行き、後の容子か
にと、大空に現はれて窺ひ寄る。
春のいふきに似たるアムラの花のおどり、鳴
呼、この花の精に魅せられて、やさしき牝コシラ
鳥は、すべての思ひ出あかき歌の竹節を
忘る、てふ花の下に、緑の若草踏み、た
きて、恋の神の侍女なる二人の少女踊り

神・物言の
とては女の
歌

狂入り。

甲女「あ、萬のもの、榮ある季ときは回入
りぬ。

乙女「さなり、宴と美酒との外はわれ等の歌
ふべからざる季とき節せうを」

甲女「友よわれに力を借せ、この樹に攀手が
てかほり高き世田を搦り、われ等の仕ふる

大神に捧げむに。」
乙女「神の賜ふる返禮へんれいをば二人して分つて

甲女「ふまでもなく、われ等は一つの心あり持
たねども、造化の大神ブラマが二つの體たいを造

へ神のみ。

一人は樹に登りて、花を摘みては地なる一人に
投げぬ。春の末若き男女の胸を射て歩り、
カマデハの神が六世助の矢の根は、この思ふの木
の花なりといふ。

かるところへ老いたる侍従出で来りて、このさ
まを見て四言る。

何奴なればかたしは神の田禁止のの禁令を破りて、かたしは果は

開き、花をむらるが。」
甲乙女「許したまへ、われ等は少も禁令のこ
とを知り侍らさず。」

侍従「知らぬとな、王が深慮を分ちては

花は雷のまゝに 開かず、鳥の調づも絶え
たると。

かくて侍従はふたりの雷もむるまゝに、王は
かの指環を一目眺むるより、一たびおけたる
サウシウ嬢を慕ひて止まらず、近來は政廳
にも出御なく、結ねては長き夜を褥の上
に悶へ眼かへ、覺めては奉仕の官女を捕
へてサウシウ嬢と呼ぶなど、物狂ほしきこと
さへ莫かる御慟。其はあさかななど物誌
りつ。

折しもあれ、王は壁人コダビヤを携へて園
の中をそゞろ歩きて此に來りしが、身に

懺悔の凶服を纏ひて、思ひにやつられたる顔の色
唇は熱に乾き、瞳は涙に曇れり。侍従は
二人の少女を追いやりながら王に近づきて、
樹かげ花園の徧行に美はさき容態を辨
する喜びを述べねども、王は心を算に留
まらず、却て宰相の許に行きて、轡を海内
を巡遊する間、おられたり萬機を攬
れと傳へよとて、侍従をばあしめか、悔
の念は雲の如くに湧きて、度暮の情は夏
の草よりも赤し。二人はマドハビの花咲き
みだる、四阿屋に入りて飽ひぬ。
さきの程よりにむふしスラセしか、アムラ

鬼は魔とまじ

の樹の梢に下りて六親ふとも知らず、人なき
林の花の匂は昼の静けさに、玉は若き
胸の中を心許せしマダビヤに洩らす。
縁たび思ひめぐらすも、解し難きは姫を折
けし折のおか心なり。いかに
鬼ありておれを魅せしが
姫が一目たび陰者の跡を追ひしも、鏡きこ
葉に空を放たれて、おれを見上げ
を人あめる眼さし、渡津海の底ひなき
にも似たりしは、今もおか目に年記して離
れぬた。あゝ姫が若しみを思へば、わか心毒
矢に刺されし如く腐蝕す。

如年

如年

△まがびや

マダビヤ「姫はみ空の國へ侍れ行かれて、彼處
に安くて在はさむ。」
ツシヤ「わか思ふは然らず、姫が生母と聞
くスレがのにむかふメカカの許にあらむ。」
マダビヤ「さらば所心を安んじ玉へ、母は
娘の長く、夫と離るるを忍び得る
ものならねば、やかて姫は若か
ねむ。指環の御手に戻りしも、よき瑞相
ならずや。」
ツシヤ「あれ彼の林を去るとし、時、姫が涙
声にて、玉ふやらむといへるに、この指環に刻める

あか名の文字を、日に一つづつ誦したまふ、おん
身のいまだ誦し終らぬに、都より近への
使者いたらむとて渡せしか。

ツシヤタ「さるにても指環こそ憾みなれ。」
マカヒヤ「臣はこの杖こそ憾みなれ。」

ツシヤタ「何を何故ぞ。」
マカヒヤ「臣が腰は弓の如く曲れり、杖のみか

く直ければ。」
ツシヤタ「心なの指環や、石竹色の匂いゆか

しき姫が指を離れて、只蓮の花のみ咲
く世に落ちつるとは。されど指環には霊な

甚だ感懐あり
るいふ也

シラジラシイ

△
追は逐ふるが
か

く、霊ある者の姫を捨てしは何ごとぞ。
マカヒヤ「君が物思ひの果つるを待たば、われ
は飢ゑて死なむ。」

この時兼て玉の命によりて、サウコタラ姫を
書きし女画師、畫幅を携へて入り来
る。王は熟らなく、打見やりて、

「睫毛長き目元、物いふが如き口つき、澄け
行く色彩のみだれた、髪及の光を見せたる類
の色など、皆わが甚だ想するところに殊ならず。
マカヒヤ「ホに、戀にも似たる繪姿かな。」
ツシヤタ「されど眞の姫には及ぶべくもあらず、
われから来りし眞の姫を追ひて、繪姿

乃みちるメチチ
と云ふし

溜

繪師はマダビヤに
向いて「歌々」の
画幅を飾りたま
ッレヤタ「お、われこそ
持つべけれ」と、奪
ふかぎ手にとりて
飽かず眺めたり。

に怪がるくわが思ふは、砂漠行く旅人の柳
子の葉茂き小川の辺りを空しく過ぎて
忽ち砂の上なる幻のおあらずに、堪え難
き喝を覺ゆるにも、飲たるかな。
かくて尚ほ背景には、雪山の林鹿マリニ河
の流れ、石根を洗へる木林の次女を見せ、前面
には牡鹿の角に美しき額擦りつけたる牡鹿
など遊ばせて、姫が小さき耳のうしろにも
シリシヤの花蔓、結はせまほしとて、女繪師
をば、繪の貝取りに遣つ。
マダビヤ「殿下見え玉へ、**姫**が織き指を上
げて、顔を掩へるは、小さき花の香の空人な

歌集

注奔 とはらほ
すとも

る蜜降の**（姫が）**花の唇より蜜を吸はんと、襟はれ
はなり。
ヅレヤタ「去れ、うるせき降め、汝は弱鹿しき
姫に**（姫が）**嫌はれても悔ひがるか。」
マダビヤ「男蜂の注奔は誰も知れり。」
ヅレヤタ「風に**（姫が）**触れざる若葉に、比すべき姫が
唇に触れんとや、去れ、蜂、わが命に従はば
われ汝を連連の花の蕊の中に禁錮すべし。か
くても尚ほ去らぬか。」
マダビヤ「何ごとを殿下、**（姫が）**只、墨魚ける蜂
なり。」
ヅレヤタ「心な**（姫が）**汝がこと葉や、われ悪うつ

しの境に入りて、眞の姫に逢ひ、喜ひもな
せむを、繪なりといひて、わが千金の夢を破
らんとは。」

かる處へ女僧師遠たゞに歸り来りて
妾が使命を婢より傳へ聞きたる王妃バス
マテ、道に已れを瘡して、**■**自ら槍の貝
箱を玉に捧ぐハナハシて放たざりしが、茨に
裳裾をとられたる隙を窺ひ逃げ来り
と告ぐ。

ヅシヤタ「増き王妃が心あかりかな、**■**
やがて此にも来るべきに、マダビヤ、急ぎてこ
の畫幅を隠せ。」

マダビヤは側わきを向きて、「臣は殿下自ら隠し
たまはむことを望まむ。」と云ひつゝも、畫幅を
持ちて去れり。

王は尚ほ姫が懐妊の身なりしを思ひ懐け、かく
て己が子無うして失せなば、社稷の祭祀こ
ゝに絶えて、夫のセレスワケの聖河の茫々無
邊際の新地に消え失するが如く、流石
に華々しかりしブルの血統も、我にて尽くる
かと、これを思ひ彼れを憂ひて、終に氣を
を憂ひて倒れたり。カムラの樹の葉蔭
よりこのさまを見たるに、むふこスラセは
飛びあでく介抱せんかと思ひしが、**■**

ば思ひ止りつ。

よかあきまを
外あきま
然あき

杏
（道入不向）

女狩師のいち早くその傍に跪き、いたはれ
心潜かに玉か姫を慕ふこと深きを喜に
びて、さらば速にかぐとメ子カの許に傳へ
んと、暁春の霞段を扇子みて、空立遣に舞ひ
上れば、アムラの花の二ひらこひら、匹維の羽風
に散るよ。
この時花の^{うしろ}見より悲しげに救を呼ぶ声、
本^木だまに御者きて聞ゆ。ツシヤシタき
つとなりて立ち上り、さてはマダビヤ、王妃の
婢どもに捕へられ、よと思ふところへ、侍従
敷け来りて、彼は書幅を隠さんとして、
榊鳩飛び交はす城樓の頂に登りしが

目に見えぬ魔ありて、撫みおれりと告ぐ、王
は見ろく、強もの武者振ひて、弓矢押取
り露台に駆け上りて、きつと虚空を眺みしが
マダビヤか悲鳴は夕^照あかき雲の彼方に聞
ゆれども、いづくに前を向けんやうもなし。
忽ち城外に輻輳の御者来りて、天上界の
王イニドラか教者マタリ、マダビヤを携へて入
り来り、玉に見えて、笑つていふ。
「何とて我に向て弓引かんとは、玉ひか。」
王は怒馬きて弓矢投げ棄て、
「よくを来玉ひつれ、天の使者。」
マダビヤ「何、この兇漢は殿下の知人とや。」

マタリ「まづ我が使命を聞き玉へ」とて陳ぶ
 るやうは、近頃ダバスの族の驕慢暮かり日
 に天の邊陲を揉めて止まらず、天上界の王も
 ほとく持てあまの玉ひて、さねば夫の七野
 の軍馬を駆る日輪も、夜の國は征難
 ●やさしき月の神却てこれを平らる習いな
 れば、こゝたびは地上の玉に傳へて、これらの
 征討たしめ玉はん大御心にて、これを
 深き夏夏●の淵に沈み座はずと聞き、激
 て氣力を昂らせん●ため、まさなき戯も
 ちしけるなりと。

魔族

王は孰と聞きをありて、斯かる光榮ある役
 目を蒙むること、弓矢の道の藝れと、直に
 マタリが乘れる戎車に同乗して、天上界
 指して走せ上る。

七、

下界の君主ツシヤラクは、天上界の王、雷霆
 の神インドウが命のまじく、王化に而しては
 ぬ外道の族を乗けて、最上天の官居に
 大神の高御座を分ちて、さまぐの御食
 齋を受け、神の身づから白壇の香を胸に
 焚きしめられ、天國の花の環を頸に巻き
 て、電光蹴散らす天馬を牽へる大輅に

(征討の)

打棄り、ツシヤシヤが軍功を讃ふる天女が唱
歌られて天の城門を出で、天人が美妙の
に送形躰を、浮ぶる微風の源なりとい
ふ。之途川を渡りて、青雨を乃子める雲の
八重路を過ぎ行けば、
目路も杳かに下界の萬象
燦として現はれ、此紫の山平地と交はり、銀
の川、雲霧に失す。中にも西と東の海を連
連ね、夕雲の如く幾子の流を灑ぎ出して
那處にそり立つ、靈山は、あれこそ下界
の仙宮にして、造化の大神、ブラマの孫た
り、また之界の盟主、イコドラの父母たる

カス、ハヤとフヂ、とか陰退の樂園を、と聞
か、かる好機を空しくせんは天の冥を護を
するに似たりと、玉は教者マタリを促して、
流星の如く其處に墜り着きぬ。
あ、生命の雲墨樹の花咲く林の霞段を食ひ、
蓮華の花粉流るゝ小河に浴みして、眞玉
白玉教り、洞に瞑想の修業を積みはし
き天女が歌舞にも道念、さる聖人た
ちの美談むべきかな。玉は車を下り立ちて、
取者、刺通せ、むる間、
夢見、心は、を駒はせ、が、右の腕に微か
なる痙攣を、見えて、

ツレヤタシは如何なる吉兆のわれを欺くに
や、今のおが身に残れる幸のありともは見え
ぬた。
かく嘆きしが、物音にふと顧みれば、童と
見えぬまでに大人び輝くばかりの顔し
たるが、子獅子のたる稚兒の、鬚鼠を掴み
て、その悩むさまを面白かりて引摺まは
す。二人の侍やありては、
赤たも、依の脱貝を興へんとし、
毛を脱せり。二人の介添の女気をいらち
て、青めつ威しつすれども放たず。
代りの脱貝を興へんと賺せば、先づそれ

渡せといふに困うじて、騙してはきかぬ兒を
て、ひとり坊の方へ走り去りぬ。この童の
旅力の強さ、童手には帝王の相現はれたり。
玉は始めより童に對して、何とはなく心の傾
くを覺えしが、近づきて二言三言論
す。童も順ほに従ひつ。可愛さに抱き上
げ上げなからう、
「怪掬き子や、他人の我れのこの兒が
指尖に触れては、いふ可からざる悦びの
胸に溢るるを、
は如何あらむ。」
侍女は二人の容子を見比べ、
ふた親の嬉れさ

「あな、不思の儀、君とまゝとの顔のいともよく似たる。まゝして見知らぬ旅人にまゝの眠く、この事の早さ。」

王はまゝを地に下ろしなから、「この兒の生まれし家門は何といふや。」

侍女「今の世に時めく、フルの眷族に属せりと聞く。」

ツンヤシタ

老いて山林に退くは、フルの族のならいとは、我も、知れり。かつ、まゝにこの世の

ものならぬ骨相あるはいかに。侍女「君が怪、誑もことわ

この兒の母は天のにむぶが女子にて、この耶麻林にて誕せしなれば。」

王「心の底に、新しき望みの蘇へるを覺えて、こと業に、まゝの父の名を知りたまふか。」

侍女「罪なき妻を追ひたる父の王の名は口にすまじ。」

さらば母の名はと思ひたれど、安りに人妻の妻に就きて問ひ糺すべきにあらねば止みつ。

この時、さきの女、剝制衣の鳥を携へて歸り来りしが、サウクタ、ラバニヤム鳥の麗は、き羽を見よ。」とてまゝの手

に持せんとうつ。
わづくサクレタラうとや、母上何處に在せし
母上の許に行かむ。

果して姪が子なりしよ。されど世には同ト名
の女もあればと、王が胸は砂漠の旅人が
の幻影に向つて走りながら抱くか如き疑
懼に波立てりしが、ふと童の腕守の解
けて地に落ちたるを見て、手に取りて
結びやりつ。これを見たる二人の侍女が驚
愕はいかに。この後、この後、符こそ
童が誕生の式に於て、神父カ
リキ

スヤ。手づかり
童に投げしものにて、一たび地に落
ちたる時、童の父母ならぬ人これを捨ひ取ら
んとすれば、直に蛇と化りて喘むといふ。
もはや何の疑ふところかあらむ、王は喜び
の余り、も童を抱き寄せたり。漸く
この本末を精し得たる侍女等は、急ぎ
この童を童の母君に奉さんとして走り行けり。
待つ間あらせず、色なき喪服に身を包ま
れ、サウコウラ姫は轉ぶか如く行きて、夫に
夫に、棄てり妻の務なりといふ勤行の嚴
しき、豊かなり、頬の肉は落ちて
束ね、黒髪は纏れて肩を掩り。されど

老悔報の三読
は、也行事上三段
活字の(文法家)

美しきはなかくと恋らありき。
童は王の手をすり抜けて、母上と呼びて走
り寄りつ。

ツレヤタ「姫よ我が罪を許せ、われは悔ひぬ
姫は言葉なくして立てり。

ツレヤタ「おん身を再び見るわが嬉れし
を思へ、わか心は全く妖魔に晦まされ

しなつさ。ロビニ星(金星?)は月蝕の止
むと共に、再び月にかへるならずや。

サクモラ「真に君にておはせしよ……
云ひ差して姫は泣伏しぬ。

母上「は何處の人ぞ。」

◎誓

跪

サクモラ「わか兒よ、只、母子のものが運命
を司り玉ふ大神に問へ」と掩抱きて泣く。

ツレヤタ「我かつれなかり……昔を忘れたまへ。
わか心は亡目目なりき。」
は友その頭

に花の環を頂かすも、蛇をと思ひて拂ふ
をかく。かく云いて玉は姫の足下に跪きつ。

サクモラ「何ををかく玉ふ、わか夫、わか
悦びは既に帰れり。」

ツレヤタ「さらば今わか、おん身の睫毛より
拭ひまぬらす涙をもて、過去の涙をも拭ひ去

らしめたまへ。」
王の
上りて、姫が顔を拭はんとする手を

眺めて、
「サウコタラハ、あゝ、この指環こそ。」
「ツレヤタラ、さなう、この指環の戻ると共に、わ
か感心も除かれよう。」
「サウコタラハ、たにわか爲めには懐かしの指環。」
「ツレヤタラ、春目立ちかへりて美しき樹の再び
花を着くろが如く、この指環も再びおん
身に返へさんか。」
「サウコタラハ、君よ、われはも早やこの指環に
信を置く能はず。」
かゝる處へ、馭者マクリ現はれて、先づ玉に向つ
て祝言を述べ、天意既に尽く成就したれ

ば、これより共にカスヤバの神前に伺候すや
とて人々を誘ふ。
嗚呼、花散つて空貫結い雲聚つて驟雨
至る。かくて玉は玉妃玉子を携へて、聖殿の
階を上り、神父神母の尊容に接して、榮譽
比びたき殊遇を受け、神の慈愍のいとも深
きを感謝せしが、嘗て、己れが心の宿業を
失ひしためとはいへ、サウコタラハ姫を追ひしこ
と、愆も大象の前に近づくを見おそて却
て砂に残せし足跡に心づくが如き愚念のなか
く、今も解し難きを怪しむに、神父静ん
鎮き玉ひて、
王が一時の迷を

具備

是れは天の神祖にまかすをせむ、
 妻に出でしなれば、呪詛の力失^すと共^に、
 明鏡の塵を掃いたらんやうに、
 王の心に映^しなりと告げ、且つ、
 は玉宮より姫を召集ひて、アゲチが殿^に
 預けたれば、姫は神・母の侍婢として、
 旨を詔り給ふに、王は今更に栗夢の
 覺めぬ如き思ひをなせり。尚ほ、神父の
 御手づから誕生の式を擧げさせられたる玉子
 は、既に猛獸を馴らす力具はりてセルバテ
 マナの名を得たるが、人と成りては七つの半島

あるこの世界を統一して、海より海に政を布き、
 バラタ大王と呼ばれるその大御言に、王、王妃
 の歡びは心にも詞にも餘りぬべく、直にマ
 リニ河の岸なる聖カシナが許に使を派して、
 ことびの落着きを知りすることしつ。やがて
 神父の御声清しく、天上界の王は豪雨
 を降して下界を惠み、下界の王は犠牲を捧
 げてこれに報ひ、永く天地の平和を保つべ
 と宣らすれば、ツシヤシヤ粹脆してこれを瑩
 ひ、かくて神の父母の大前を滑り出でぬ。

(完)

紙教三枚、おろし開闢以来の大作、平井源君が苦心をこめて
と思はれぬ、しむにもビルドリッヒ、アウストリックの典正富
たもには驚き申す、サクシタラの原文はまた見ねど、これだけ
に、巧みに、ちいめ、殊に原文、妙所々々、美しき君が筆に
ようて、うかひ得たれば、原文をよむとも、以上の面白味はな
かへく思ひぬ、みぢは集ぶりの、何とほおしに、なつこのしき、
筆のまごうく及びがたくし、
~~上~~ 回覽見目教一月なる為め、一々
か、読むひまなければ、何れ印刷の後をほ、詳しく拝見
祈すべし (まじし)

